

ひろがた どう ほこ い が た
広型銅矛鑄型

大野城市教育委員会



図1

弥生時代には数多くの青銅器が作られました。青銅器は鑄型を使って作られました。今回この解説シートでご紹介するのは、弥生時代後期（いまから約1800年前）に「広型銅矛」という青銅器を作る時に使われた鑄型です。

この鑄型は平成元年に発見されたもので、長さが44cm、幅が18cm、厚さは8cmほどです。石を加工して作ったもので、重さが11kgほどあります。図1の写真で鑄型の表面の手前側と先端部が黒くなっているのがおわかりでしょうか。これは高温の青銅が流し込まれた時に焼けたためで、この鑄型が実際に使われたことを表しています。

実はこの鑄型は広型銅矛の先の方半分くらいしかありません。広型銅矛は全長が80cmにも達する大きなものなので、先半分と後半分の鑄型をそれぞれ用意しておき（つまり鑄型は全部で4個）これらを連結して青銅を流し込み製品を作ったのです。

では、実際にどのようにして青銅器を作ったのでしょうか。広型銅矛を例にとると、図2のような方法だったと考えられています。まず、鑄型を隙間なく合わせます。この時、片面につき先半分と後半分の鑄型が必要なので、鑄型の数は全部で4個になります。青銅は銅と錫の合金です。合わせた鑄型に高温で溶かした銅と錫を流し込みます。この時高温の青銅が鑄型の外にもれると大変危険ですので、鑄型どうしの合わせる部分は非常に丁寧に作られています。青銅が冷えて固まったら鑄型をはずします。青銅が型からはみ出したりしている部分を取り除き、形を整えます。最後に全体を磨いて完成です。現在私たちが各地の博物館や美術館で見ることのできる青銅器は、大体のものが錆びて緑色をしています。青銅は本来金色なので、完成した時は目もくらむばかりに輝いていたのです。

このようにして作られた広型銅矛は、武器の形をしていますが刃がつけられておらず、戦いに使われたものではなく、いろいろなお祭りに使われていたと考えられています。

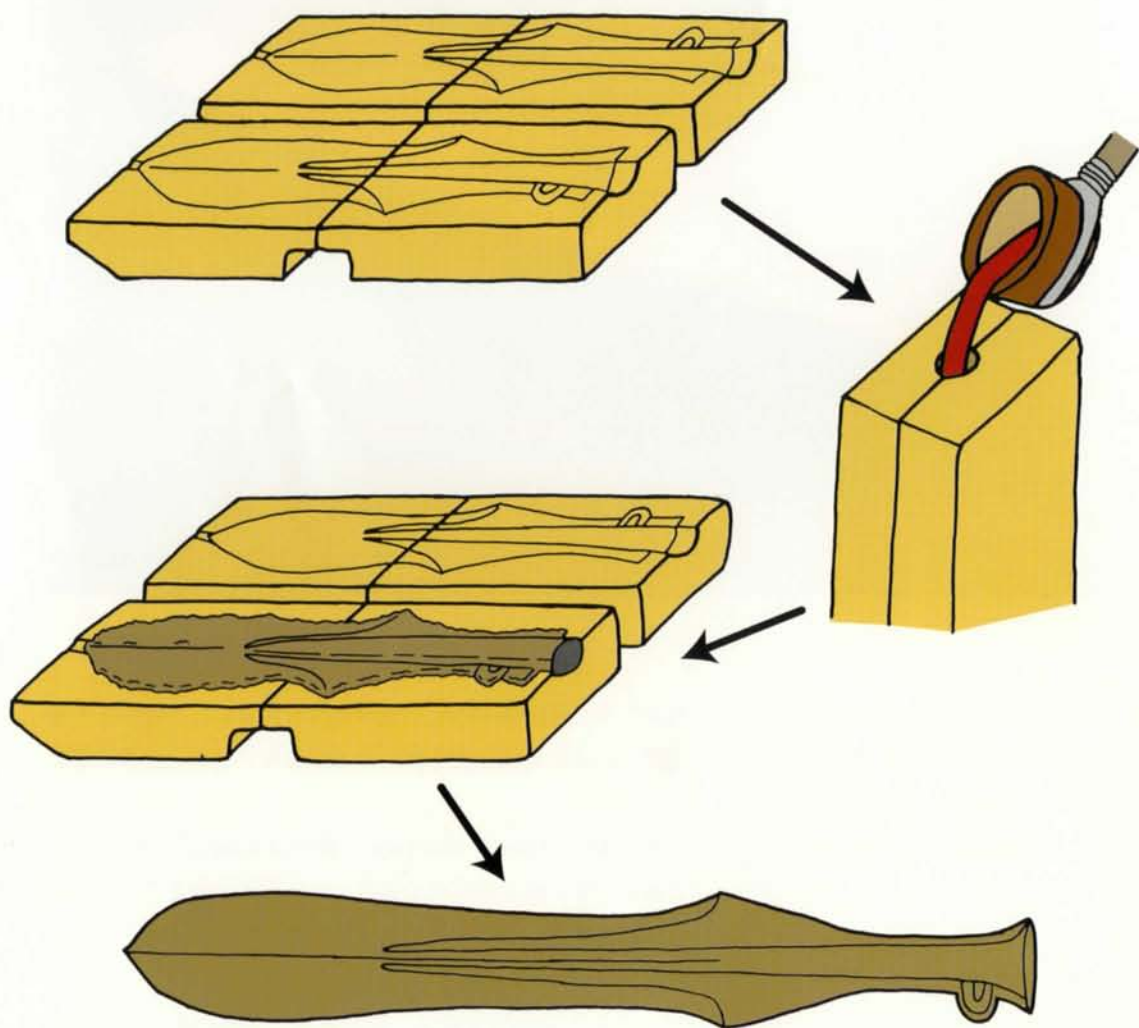


図2